森林景観整備シリーズ

第２回

森林景観整備は何に基づいて行えばよいのか

技術士（森林部門）由田幸雄

はじめに

景観は好みであると思っている人もいますが、もしそうであるならば景観整備はできなくなってしまいます。景観はすべてが好みではありません。年齢や性別、国籍等が違っても、人間に共通する「景観の価値」があります。したがって、景観整備はそれに基づいて実施すればよいのです。「景観の価値」がなぜ人間に共通するのかというと、それは「自分の命が一番大切だ」という動物の生存本能に基づいているからです。

景観の価値について、ここでは次の３つについて説明します。

ア　眺望がよく安全だと感じられる空間は好まれる（**眺望―隠れ場理論**）

イ　自分のまわりの状況が分かる方がよい

ウ　自分がどこにいるのか分かる方がよい

１．人間に共通する景観の価値について

1.1 眺望―隠れ場理論

人間にとって最も大切なものは自分の命です。したがって、それが守られている環境あるいは生存に適した環境はプラスに評価されるという考え方があります。そこから生存に適したように見える場合も景観的な評価が高いとする考え方が生まれました。英国の地理学者ジェイ・アップルトンが唱えた「眺望―隠れ場理論」がそうです。この理論は、自らは眺望がよいところにいて周りの状況を把握できるが、その一方、自分には隠れるところがあって安全である、そういうことを象徴する空間が好まれるというものです。

どういう状況が安全であると感じるかといえば、自分の居る場所がまわりから区分されていて､守られていると感じられる場合です。たとえば、家の中は外と明確に区分されているので、守られていると感じます。ここで、守られているというのは、自分が大切にされているということです。自分が大切にされていると感じられる空間は、居心地がよく、くつろげる空間になるので好まれます。以上のことを日本庭園の事例で説明します。

写真１は、新宿御苑にある建物の中から庭園を眺めている人を撮ったものです。

写真１　庭園を眺める人（28mm で撮影）

写真２は、その人の位置から庭園を撮ったものです。建物の前方には水面（池）が広がっているので見通しがよく、庭園を一望で

きます。その一方、眺めている人は、水面と建物によって、まわりとは明確に区分されているので守られていると感じます。また、屋内にいるので雨露にさらされることもなく居心地のよい状況にあります。このようにまわりの見通しがよく、まわりから明確に区分されていて安全だと感じられる空間は好まれます。

写真２　建物からの眺め（28mm）

以上のことから、反対に人間に好まれない空間も分かります。それはまわりを眺望することができず、その一方、周囲からの視線にはさらされている場合です。つまり、自分からは相手（敵）が見えないが、相手（敵）からは見られているという状況です。それは具体的にはどのような状況かといえば、見通しが利かないヤブのような前にいるときです。ヤブの中は見通せないので、そこに自分に危害を及ぼすものがいても分かりません。そのため安全でないと感じるのです。私たちは、草木が茂ったヤブのような状態よりも草木が少ない疎林の方が居心地よく感じますが、それはこの理論からも説明できます。なお、ここでヤブというのは、草や樹木が繁茂していて、その内部や地面が見通せない状態のことをいいます。

人間はまわりがヤブの状態を好まない

これは、森林景観整備を行う上で、非常に重要なことなので写真で説明します。

写真３の２枚は、公園の池のほとりから池を撮ったものです。**（左）の写真**は、生い茂った草のすぐ前から撮ったものです。草の密度が高く、その内部がどうなっているのか分かりません。このように中を見通せないヤブの前では、何となく落ち着きません。長く留まりたいとは思いません。**（右）**は、その草から少し離れた位置から撮ったものです。まわりの状況が分かるようになったので少し安心感が生じます。

（左）ヤブの前から　(右)ヤブから離れて
写真３ヤブから受ける印象の違い(50mm)

もう一つ別な事例を紹介します。

写真４と**５**は、ともに日本庭園の苑路（通路）からの眺めです。**写真４**では、ササが苑路沿いに繁茂しているので圧迫感があります。また、見通しが悪く、不安になるので早く通り抜けたいと思います。

写真４苑路のまわりが見通せない

一方、**写真５**では、苑路のまわりが芝生地となっており、見通しがよいので、まわりを見ながらゆっくり歩きたいと思います。

写真５　苑路からの見通しがよい(28mm)

展望台等のまわりはヤブにしない

山地の展望台等では、そのまわりがヤブのような状況になっている事例が多く見られます。しかし、人間は誰もがそういう状況は好まないので、まわりのヤブは刈り払い、地面が見えるようにすることが大切です。

次に、景観の価値の、「自分のまわりの状況が分かる方がよい」と「自分がどこにいるのか分かる方がよい」について説明します。

私たちは、景観（眺め）から自分をとりまく環境の視覚的な情報を得て、行動しています。その際、上の２つは安全に行動するために必要であり、究極的には人間の生存に関わることです。

1.2 自分のまわりの状況が分かる方がよい

山地では歩道のすぐ隣が崖になっているということがあります。その場合、まわりの見通しがよく、崖のあることが分かれば、より安全に行動することができるので、まわりの状況が分かる眺めの方が好ましいと思います。そのことを写真で説明します。

写真６の２枚は、公園の池のほとりからの眺めです。**(左)**の写真では、目の前に草が茂っているので、どこから池なのかが分かりません。**(右)**は、撮影位置を少しずらして草のないところから同じ方向を撮ったものです。この眺めでは水際が見えるので、どこから水面（池）なのかがよく分かります。また、水際の手前が整備されていて堅固なことも分かります。この眺めのように自分のまわりがどうなっているのか分かる方が好ましいと思います。

(左)水**際が分からない**　**(右)水際が見える**

写真６　池のほとりからの眺め(50mm)

もう一つ別な事例を紹介します。

写真７の２枚は、公園の一角から東京スカイツリーを撮ったものです。**(左)**の写真は撮影位置のすぐ前に生垣があるので、自分のまわりがどうなっているのか分かりません。山地ではよくこういうことがあります。

(右)は、その生垣を越えたところから同じ方向を撮ったものです。まわりが平坦で、砂地が広がっているのが分かります。この２つの写真では、見たいもの（スカイツリー）は全く同じく見えています。しかし、**(右)**の眺めの方が好ましいと思います。それは自分のまわりがよく見え、安全な場所にいることが分かるからです。

山地の展望台等では、写真７（左）のように見たいものはよく見えているが、展望台のまわりがどうなっているのか分からないという場合があります。そのときは写真７（右）

のように視点前方にある草を取り除いてまわりの状況が分かるようにするとよいでしょう。

(左)まわりが見えない　(右)まわりがよく見える

写真７　公園からスカイツリーを望む

1.3 自分がどこにいるのか分かる方がよい

日常生活では自分がどこにいるのか分からないということは滅多にありません。自分がどこにいるのか分からなくなったら不安になります。**写真８**は、市街地で案内図を見ている人を撮ったものです。このように分からなくなったら案内図を見て、自分のいる位置と目的地を確認します。

写真８　自分のいる位置と行き先を確認する通行人

しかし、山地では、市街地のように案内図はなく、目印となるものも少ないので自分がどこにいるのか分からなくなることがあります。そのときに山などが見えると自分のいる位置がおおよそ分かります。私たちは、山地の展望台等では名のある山や湖を見たいと思います。それは、それらを見ることによって自分のいる位置がおおよそ分かるからです。山や湖のほかにも、大橋や大ダム、特色のある建物なども目印（ランドマーク）となるので、それらを拠り所にして自分のいる位置をおおよそ推定できます。それは道しるべとしての眺めとなり、案内図を見るのと同じような効果があります。

以上のことを踏まえると森林景観整備では、次のことが重要になります。

ア　展望台等からは、山や人工物（大橋、大ダム等）等の位置情報を与えてくれるものがよく見えるようにする

イ　利用者に道しるべとしての眺めを提供するため、山や人工物等が見える位置に視点を設けて、眺める場所を整備する

このイの具体例を次に紹介します。

写真９は、道しるべとしての眺めを提供するため、道路沿線に視点を設けて、そこから大ダムが見えるよう、整備した事例です。

(上)整備前の眺め　(下)整備後の眺め

写真９　道しるべとしての眺めを提供する

見通しを確保した後に撮った眺めです。正面に山並が、そして山の中腹に大ダムが見えています。ここでは名のある山がありませんが、ランドマークとなる川治ダムが見えるので、ここを訪れた人は、自分のいる位置がおおよそ分かります。道しるべとしての眺めになっています。

以上、景観の価値とそれに基づく整備の考え方を説明しました。

次に、景観の価値に基づく森林景観整備の内容について、具体的に説明します。

2．景観の価値に基づく整備の内容

森林景観整備のうち、特に重要な視点まわりの整備について示すと次のとおりです。

ア　眺める場所（展望台等）のまわりはヤブにしない

イ　眺める場所のまわりの状況(斜面傾斜等)が分かるよう、草木を整理する

ウ　自分のいる位置を教えてくれる山などが見通せるよう、視点まわりの邪魔な樹木等を取り除く

2.1 整備の内容

以上のことを模式的に示したのが**図 1** です。この図では、視点のまわりは平面図で、山は立面図で表しています。図について説明します。

眺める場所に面した黄色の部分は、ヤブにならないよう、草木を刈り払い、地面が透けて見えるようにします。その奥の緑色の部分は、まわりの状況（斜面傾斜や凹凸等）が分かるよう、草木を低く管理します。また、見たいものが見えるよう、見通しを阻害している樹木を取り除きます。図の●印は見通しを確保するために取り除く必要のある樹木を示しています。見通しの確保では、視点から見たいものを眺めたとき、その中心から両側 20 度、すなわち 40 度の範囲内に邪魔な樹木等が立ち上がらないようにするのが基本です。また、眺める場所に近接している樹木は原則として取り除きます。一方、○印は邪魔にならない樹木です。

図 1 の長方形の部分が整備する範囲になりますが、これは、視点前方の斜面傾斜によって変わってきます。斜面傾斜が急な場合は、図のＬ1 とＬ2 の距離は短くなります。その反対に緩やかな場合は長くなります。これはイメージ図ですが、整備の内容はおおよそ分かると思います。森林景観整備の内容は、これだけなのかと思う人もいるかもしれませんが、眺める場所のまわりの整備はこれで十分です。

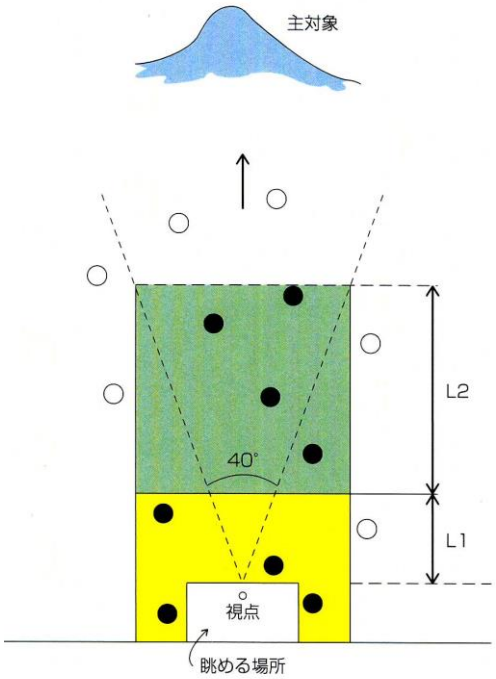

図 1　眺める場所のまわりの整備内容

次に、眺める場所のまわりのヤブの整理について、実施事例を紹介します。

2.2 展望台まわりのヤブの整理

展望台まわりのヤブを取り除くとどのよう

な効果があるのかを実施例で説明します。

写真 10 の 2 枚は、展望台前のヤブの整理前後の状況を比較したものです。

(上)展望台の前はヤブ

(下)展望台の前はヤブになっていない

写真 10　展望台前のヤブの整理前後の状況

(上)の写真では、展望台のすぐ前に草が繁茂しています。草丈は柵の高さよりも少し高くなっています。この状態だと柵に近づいて眺めたいとは思いません。一方、**(下)**では、展望台の前にヤブはなく、地面もよく見えています。この状態だと安心して柵のすぐ前から眺めることができます。このように人間は自分のまわりがヤブの状態を好みません。

さらに展望台の前にヤブがあると、次の２つの問題が生じます。

その一つは、ヤブがあることによって見たいものの眺めの評価が引き下げられてしまうことです。

写真 10 の(上)の状態でも見たいものは見えました。しかし、目の前にヤブがあるので、それも一緒に見えてしまいます。そうなると人間はその一緒に見えているものによって、見たいものの評価が左右されてしまうのです。つまり、見たいものでないもの（ヤブ）によって見たいもの（山）の評価が引き下げられてしまうのです。ヤブは見たいものではないので、取り除く必要があるのです。

もう一つの問題を説明します。

眺望―隠れ場理論の説明で、自分が大切にされていると感じられる空間は、居心地がよく、くつろげる空間になるので好まれることを説明しました。自分が大切にされていると感じられると心地よくなるので、そういう状況で眺めると見たいものの眺めの評価が高くなります。しかし展望台の前がヤブになっていれば、自分が大切にされているとは感じられないので、そこからの眺めの評価は引き下げられてしまうのです。

2.3 眺める場所の整備

眺める場所の整備について説明すると、その要点は、そこを訪れた人が大切にされていると感じられるように整備することです。

具体的には、①ゴミがない清潔な場所にする、②休むことができるようベンチを設ける、③見ているものが何であるのか分かるよう説明板を設置するなどです。要するに、ゆっくりとくつろげる空間をつくることが大切です。

以上、森林景観整備の内容について、その基本的な考え方と整備の内容について実施事例により説明しました。さらに、詳しくお知りになりたい方は、拙著『森林景観づくり』をご覧になって下さい。

次回は、「視点の選定はどう行えばよいのか」について説明します。